



さくら ぎ じん じや
桜木神社

7 茅野神田

931年(古代)

承平元年(931)11代茂村により小野出馬に創建と伝えられ、江戸中期に今の神田の地に移されました。仁壁神社の行宮で、境内の桜は宮野桜島のものを植樹したと言われています。天文11年(1542)の文書によると本社、仁壁神社、今八幡宮が山口三社とされ、流鏑馬なども盛んに行われていました。鳥居前の狛犬は日本三大天神と同じ萩狛犬です。



ひ よし さん にん へい じ あと
日吉山仁平寺跡

9 菅内

1151年(古代)

仁平元年(1151)の創建とされ、興隆寺、乗福寺とともに大内文化を支えた三大寺院です。舞楽舞踊が盛んで、觀応3年(1352)、24代弘世の頃の本堂供養日記には「十一番狂言山伏説法」とあります。これは芸能としての狂言の文献上の初出です。現在の地に移る前には、仁王門や五重塔もありましたが今はその姿を見ることは出来ません。



なん めい ざん じょう ふく じ
南明山乗福寺

10 御堀

1305年(中世)

嘉元3年(1305)、22代重弘の創建と伝えられています。ここは後に勅願寺にもなった臨済宗の古刹で、室町時代の作とされる伽藍図(県指定文化財)をはじめ、大内氏の始祖琳聖太子の供養塔や隋身像、開基重弘、24代弘世の墓、みづが溪の蛇頭など、多くの文化財があります。境内には、上田鳳陽や服部東陽の墓もあり、秋の紅葉は見事です。



みょう かん じ
妙鑑寺

11 上矢田

1342年(中世)

康永2年(1342)、西光寺として創建、毛利氏移封後、矢田を領地とした宍戸六郎が先祖の妙鑑大姫の位牌所としたため、妙鑑寺と改められました。大正9年(1920)火災に遭いましたが、山門、両袖門、銀杏の木は焼け残り、山門の脚には今もそのときの焦げ跡が残っています。火災後再建された位牌堂はレンガ造りで、電灯がなかった時代の明り取りの窓などの工夫が見られます。



お の じ ぞう いん
小野の地蔵院

13 小野／1397年(中世)

応永4年(1397)、25代義弘の創建と伝えられ、平安中期の天台宗僧、惠心僧都作の地蔵菩薩があつたとされています。大正14年(1925)、火災で建物等が焼失。本尊は京都で修理。昭和2年(1927)に開眼式が行われました。本尊は丈六で結跏趺坐という珍しい姿の地蔵菩薩で、腹帶地蔵とも呼ばれ安産祈願に多くの人々が参拝しています。



なが の はち まん ぐう
長野八幡宮

8 宮ノ馬場

1089年(古代)

寛治3年(1089)、長野の長者、平忠平が大分宇佐から勧請したと伝えられています。社殿は江戸中期に再建され、参道の鳥居前には二義少年を弔う2基の燈籠、境内にはどんな日照りの時にも枯れることがないと言われる泉ヶ池、畔には「古池やかわづとびこむ水の音」の芭蕉の句碑などがあり、大内地区を代表する神社として親しまれています。



ひ よし じん じや
日吉神社

9 菅内

1151年(古代)

仁平元年(1151)、仁平寺の鎮守として、比叡山から勧請されました。本殿は宝永元年(1704)、楼門は延享2年(1745)に再建されましたが、平成3年(1991)に台風19号の被害を受け屋根は銅板葺きになりました。大内菱の意匠が施された山口特有の楼拝殿形式の拝殿は大内時代のおもかげを今に伝えています。



いにしえ じょう ふく じ だい が らん
古の乗福寺の大伽藍

10 御堀／1305年～(中世～)

大内氏の時代、乗福寺は御堀の県住あたりを頂点に谷間全体に伽藍が配置され、氏寺興隆寺と並ぶ規模を誇っていました。創建当時、檜皮葺きであった建物は、後に中国を起源とする敵水瓦、大陸風の道具瓦や搏を用いた大陸風の建物に生まれかわり、琳聖太子を始祖とする大内氏にふさわしい大伽藍になりました。



し だ り はち まん ぐう
志多里八幡宮

12 小野

1352年(中世)

正平7年(1352)、24代弘世の時、家臣で小野の領主、平弘兼が大分宇佐から勧請しました。境内には、神社の由来を記した志多里八幡宮碑や明治の郷土史家近藤清石の撰による江戸後期の神主佐伯八雲の石碑を乗せた亀趺、銀杏の大木などがあり、秋には黄葉が映え、初詣には多くの人々が訪れる、地域に敬愛されている神社です。



はぎ おう かん
萩往還

14 大内全域

江戸時代(近世)

慶長9年(1604)、萩城築城後、参勤交代道として開かれ、幕末には萩の吉田松陰や土佐の坂本龍馬など多くの志士が駆け抜けました。萩から防府までの全長53kmのうち、鰐石から終までの4.5kmが大内地区を走っており、氷上には一里塚、終には駕籠建場などの施設が置かれ、幅4mの街道沿いには昭和20年頃まで往還松が残っていました。